

# 第1章 戦場

樺太での戦い

## もうダメかもしれない

上田一男さんのお話から

○上芦別 現在の芦別市  
上芦別町。富岡国民学校  
は現在の上芦別小学校の  
前身。

○国民学校 昭和十六年  
(一九四一年)の国民学校  
令というきまりにより、  
小学校を改め成立した学  
校。

○赤紙 人を軍隊に呼び  
集める命令書。赤色の紙  
を用いたので「赤紙」とい  
う。

○大泊 表紙裏地図

○上敷香 表紙裏地図

○鉄兜 弾丸・落下物な  
どから頭部を保護する鉄  
製の帽子。

○銃身 銃の弾丸が通る  
円筒になった部分。

○夜半 よなか。まよな  
か。

昭和二十年(一九四五年)六月下旬、上芦別にある富岡国民学校に教員として勤めて二年目だった私に、札幌の実家から「赤紙」が来たど連絡がありました。当時、兵隊に行くということは即ち「死」へとつながっていたため、連絡を受けたときは「いよいよ兵隊か…。」と思いました。

入隊前日の六月三十日夕方、国鉄の琴似駅前に入隊する仲間を代表して挨拶をした際に、集まった人々を見渡したところ、私の母が表現しようもない表情で私を見つめる姿が眼に入りました。今でもあの悲しげな、そして何かにすがりつくような眼が浮かんできます。

入隊してから三日後、稚内の港から軍用船に乗り、宗谷海峡を渡って南樺太の大泊港に渡りました。大泊からは列車で、ひたすら北へ北へと向かい、目的地である上敷香という町に到着しました。上敷香では幹部候補生として初年兵教育を受けました。教育といっても、ミカン箱の半分くらいの大きさの爆弾を抱えて敵の戦車に体当たりする訓練などが中心で、射撃の訓練では的を外すと、教育係に鉄兜の上から銃身で殴られたりもしました。

八月九日の深夜、起床ラッパの合図で起こされ、急いで身支度をして外に整列すると、中隊長から「今夜半、ソビエト軍が樺太国境を越え、国境部隊と交戦中である。本中隊は、戦態を整え待機すること。」との命令が下されました。私たちは、あわてて銃剣や小銃弾、手榴弾などを身に付け、いつでも出発できる態勢を整えて待っていました。夜が明けた午前九時過ぎ、北の空から戦闘機が一機飛んできました。機体に日の丸らしきものが見えたので「日本に

○塔路 表紙裏地図

○尿意 小便がしたいという感覚。

○雑囊 肩にかける布製のカバン。

○恵須取 樺太が日本領だった時代の名称で、現在のウグレゴルスク。上恵須取とは、恵須取工場市街(山市街)のこと。表紙裏地図

も速い飛行機があるなあ。」などと仲間と話していたところ、急降下をしてきたのでよく見ると、日の丸ではなくてソビエトの星のマークでした。「敵機だ！」と口々に叫ぶと、機銃掃射から蜘蛛の子を散らすように四方八方に逃げました。

八月十五日早朝、上恵須取という町に着した私たちは、戦いの場である恵須取に向かうため、手榴弾一個を雑囊に入れ、小銃弾百二十発を腰に付けて、小銃を手にトラックに乗り込みました。そのとき、「武者ぶるい」というのを初めて体験しました。かなりの緊張感のため、歯がカタカタと音をたてて鳴り、尿意をもよおすものを用を足そうとしても出ない、ということを一、二、三回繰り返しました。私だけでなく、周りの兵隊がほぼ全員そうでしたが、「出発！」という指揮班長の声がかかるとピタッと止まりました。恵須取に着いた私たちの中隊は、塔路という町と恵須取を結ぶ道路の一角に陣地を構えて守備につきました。



出征の様子

イメージ図

もうダメかもしれない

○復員 招集された軍人が軍務から解放されて帰ること。

○艦砲射撃 軍艦に備えてつけてある大砲などから弾丸を発射し、ねらい撃つこと。

○内路 日本の領有下において樺太に存在した

八月十六日、ソビエト海軍陸戦隊が塔路に上陸作戦を開始し、ソビエト空軍戦闘機から一時間に渡って機銃掃射を受けました。戦闘機が急降下するときの独特の爆音と機銃掃射音を耳にするたびに「今度は当たるかも

。。。」「もうダメかもしれない。」などと考えながら、草の茂みに身を隠していました。

この時の恐怖感はいつまでも残っており、復員してからも何度も夢に見ました。

ソビエト軍の艦砲射撃と戦闘機の機銃掃射により、恵須取の街は黒雲に包まれ、住民の大半は山中に避難しました。私たちの中隊は、ソビエト軍と約五百メートルの距離で向き合って、二、三度小さな戦闘があった後、住民を守りながら東海岸に向けて退却を始めました。この時の夜空を赤く染める恵須取市街地の夜空が強く印象に残っています。

翌十七日から二十二日までの間は、東海岸の内路という町に向かって東へ東へとひたすら歩きました。道のりは険しい山道で、まともな食事や睡眠を取った記憶もありませんが、疲れて歩きながら眠っていたような気がします。道



イメージ図

引揚船の日の丸

村。表紙裏地図

端には、気力も体力も失って、気がぬけてぼんやりと座り込んでいる老人や、両親とはぐれて流す涙も枯れてしまった三、四歳の子どもの姿など、悲惨を超えた光景がいたるところにありました。

- 白雲峡 樺太にある峡
- 谷の名称。
- 捕虜 戦争などで敵に捕らえられた人。

八月二十二日、ソビエトとの間で停戦協定が成立しました。その夜は、それまで行動を共にしてきた軍馬を処分して、泣きながらその肉を食べました。翌二十三日、恵須取と内路のほぼ中間地点にある白雲峡という所で、ソビエト軍による武装解除を受け、捕虜の身分になりました。当時、捕虜の生存権などを保障する国際協定については知る由もなく、自分たちはやがて殺されるものだと思っていました。

捕虜としての生活は、与えられる食事が毎食約十センチ四方のパン一枚だけで、道路整備などの重労働を課されました。お腹が空くため、道端の野草やカエル、ウサギなどの小動物を取っては何でも食べました。

そんな抑留生活が四百八十三日間続いた後、昭和二十一年（一九四六年）十二月中旬、真岡港から引揚船に乗って函館港に帰ることができました。引揚船に乗って、掲げられた日の丸の旗を見たときは、日本に帰れるんだと実感し、皆で涙を流しました。

いま思い返すと、戦争というのは同じ人間同士が殺し合うという、人間が人間でなくなる異常な状態です。決して二度と繰り返してはならないと強く思います。

○真岡 表紙裏地図

もうダメかもしれない

DATA

平成22年度西区平和事業  
聴き取り

- ・平成22年8月25日
- ・西区役所



上田一男(うへだ・かずお)さん

- ・大正15年(1926年)生まれ
- ・札幌市西区在住